慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三州横山話, 早川孝太郎著
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.347- 348
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0347

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第二卷には、前編に、「鎌倉前期」のもの百餘種を、中編に、「鎌倉後期」のもの八十餘種を、後編に、「南北朝期」のもの百十餘種をおさめ、

第三卷には、前編に、「室町前期」のもの百十餘種、中編に、「室町後期」のもの七十餘種を、後編に、「桃山期」のもの百餘種を各おさめ、總計で七百六十餘種となる。

これに、追加並に別冊のものを加ふる時は、九百種の多數に達するのである。

而して、これ等各種の終毎に、「小結論」を附し、其の時代時代に於ける、金石文の特徴等につきて、論述せられ、最後に、「總結」を附し、同氏の金石文に關する、十數年來の研鑽の結果を論述せられてある。

猶第三卷の終に、附錄として、「銅鐸篇」、「斯界に於ける先人の業績」の二編並に、「鑄師名錄」を附載せられてある。要するに、同氏は「寶れない本」といふことなどは顧みず、獨力でかゝる大部の編纂物を學界に提供せられたるは、同學のものと共に、感謝する次第である。

最後に加へて置くが、同氏はこの金石史發行記念のために、去十二月三日、大阪美術倶樂部に於て、金石文拓本展覽會を催され、起稿の際に、役立たる手拓を主とし、かつ學友等より贈られたるもの、合せて百七八十種を陳列し、當日は數百名の來觀者があり、盛會であつたとの事である。

猶參考迄に記しておくが、これ迄で金石文拓本展覽會は明治四十四年五月、大阪府立圖書館に於て、開催せられたのが最初で、第二回は大正二年十月名古屋市會議事室に於て、第三回は、大正五年十二月奈良女子高等師範學校に於て催され、第四回が、即ち前記同氏の好尚會出版部主催に依るものである。

十年十二月二十日（武田勝藏）

三州横山話　早川孝太郎著

玄文社から發刊されてゐた鄙邊叢書が、清楚な體裁に變つて鄕土研究社から續刊される事となつた。本書はその第六篇で三州豐川の上流横山に育つた著者の幼時聞いた話、又は其後歸省の度に見聞した話を集めたものである。著者の態度の長所は、普通の物語蒐集者の面白く話を作りかへて話すといふ態度の見えないことで、假令斷片的な物語も之を其儘忠實に書きのせてある。種々な人、山の獸、鳥の話、蛇の話と云ふ風な網目で集めてあるが、面白いのは今昔物語などと同樣な話が存在する事である。即ち八十三頁の「女を追ふ蛇」は、今昔物語卷廿九「蛇見女陰發欲出穴當刀死語」と同樣であり、百五頁「蜘蛛に化けて來た淵の主」は、卷廿三「相撲人海恒世會蛇試力語」と相類似し、九十三頁「シラミ屋敷」は、古今著聞集卷廿、シラミに食はれて死んだ男の話と同樣である。かやうな話は、今昔物語作成以前から流布した民話であつて一方で記錄せられた事を知らずに依然此村の或人に關し或時起つた事として物語られてゐたのか、或は今昔物語を讀んだ者が之を作り

かへて仲間に傳へたのであるがその由來は不明であるが、幸ひに之によつて知られる事は在來の史料と別種な然も價値に於て少しも遜はぬ古代生活の Survivals が今日もなほ民話或は民間行事等の形に於て僻村の間に傳へられ、同情ある採集者の手を待つてゐると云ふ一事である。

（松本信廣）

Lewis Spence; An Introduction to Mythology. London, 1921.

神話は古代民族及び原始民族の信仰、人生觀、及び世界觀の綜合であると言つていい。これをもつて彼等は自己の起源と光輝とを語らんとする。それ故いづれの古代民族の歴史も神話をもつて始まるのである。すくなくとも多少の神話的色彩をおびざるはない。從つて古代文化史研究にあたつて神話の占むる地位は第一にきたるものであらねばならぬ。しかるに多くの人々は神話研究を等閑にするが故に、史實として解すべからざるものをも史實となし、甚しきはすべての物語をそのまゝ事實とみんとする。かかる傾向は、自國の神話、歴史の研究にあたつて殊に著しくあり、素朴歴史家の常に陷りやすき危險である。この危險をさけるためには、まづ神話學の知識を必要とする。即ち神話の性質、起源、發展、種類等についての一般概念を得ねばならぬ。この要求に應ずる最近の好著として、スペンス氏の神話學概論を紹介したい。

學問に定義をくだすことは、その學問の研究に甚だ便でありかつ必要であるが、また同時に困難である。ことに神話學のごときは、比較宗教學、民俗學と密接なる關係を有し、從つて往々混同されその區別も曖昧となるのであるが、本書の著者は、神話學をもつて、かつて行はれた信仰であつた原始的もしくは初代の宗教研究でありとなし、民俗學をもつて、今なほ行はれてゐる原始的宗教及び風習の研究となした。從つて神話學は宗教學の一部をなすのである。けれども神話、及び神話學の見解は、從來人により時代により區々として一定しない。ギリシアの Xenophanes (B.C. 540-500) より今日にいたるまで多くの變遷をなしたのであつて、Max Müller, Sir E. B. Tylor, William Robertson Smith, Andrew Lang, Sir James George Frazer 等其他最近にいたるまでの神話學者の見解に對して、著者は一々紹介批評をなしてゐる。今日においては、言語學派の見解はもはや信じられないものであり、また人類學派の見解と雖もことごとく是認することを得ない。ことに神話が宗教的性質を有するや否や、また神話と儀式とはいづれが最初の起源なりや等の問題は、Lang や Smith によつて論議されたのであつて、ランゲは宗教と神話とを嚴密に區別し、スミスは神話が儀式を說明するために作られたものとするのであるが、今日の學者は、神話がその性質において大部分宗教的のものであること、また神話がその起源において儀式に先立つのであるが、たゞ副次的意味のものが儀式より由來したることを信ずるのである。

しかし著者が從來の諸學者を批評するにあたつて、いささか不滿を感ずるのは、民族心理學を大成して神話に對し獨特の見解を